

2025 年度 ワンダーフォーゲル部部誌



目次

部長挨拶	p.2
ワンダーフォーゲル部の年間行事	p.3
ワングルの装備説明	p.4
キャンプについて	p.8
夏合宿　～穂高岳～	p.11
冬合宿　～小豆島～	p.18
六甲全山縦走	p.23
春合宿　～阿蘇～	p.27
編集後記	p.32

～部長挨拶～

こんにちは。第 55 代灘校ワンダーフォーゲル部部長の福井です。

本日は第 79 回灘高文化祭にお越しいただき、そしてこのワンゲルのブースで部誌を手にとって下さりありがとうございます。

ワンダーフォーゲル？なにそれ？という方もいらっしゃると思うので、ここで簡単に紹介をさせていただきます。

ワンダーフォーゲルとはドイツ語で「渡り鳥」という意味で、この部活は登山などの活動を通して豊かな自然と触れ合って楽しもうというものです。山岳部(この学校にはありませんが)とは少し違って、2022 年度のしまなみ海道での冬合宿のように、ときには登山とは違った活動をすることもあります。

この部は学校では運動部の一つとして扱われていますが、他の運動部と比べると異色の部活と言えるでしょう。レギュラー争いどころか競争という概念がそもそもありません。部員のそれぞれ一人一人が、山に登って自然を楽しむという目的で部活に参加しているのです。もちろん、安全に楽しむために、普段から体力作りや準備を行っています。

しかしワンダーフォーゲル部でしか体験できない素敵な体験は数多くあります。山の頂上から壮大な景色を見下ろしたり、下界では見られない美しい高山植物に癒されたり、仲間とキャンプ場で寝食を共にしたり…その一つ一つが、部員全員にとって大切な思い出となっています。

ここではそんなワンゲルの魅力を、昨年 1 年間のイベントを振り返りながら皆様にお伝えしていきたいと思います。

Welcome to *Nada Wander Vogel Klub* (NWVK)!!

さあ、美しい山の世界へようこそ!!

灘校ワンダーフォーゲル部部長 福井 秀卿

～ワンダーフォーゲル部の年間スケジュール～

4月	部員勧誘・オープンワンデリング(於：六甲山)
5月	文化祭
6月	夏の市ヶ原キャンプ
7月	本庄橋キャンプ
7～8月	夏合宿(2024年度：穂高岳)
9月	高2引退・世代交代
10月	追い出し会
11月	秋の市ヶ原キャンプ
12月	冬合宿(2024年度：小豆島)
1月	OB会・六甲全山縦走
2月	駅伝大会
3月	春合宿(2024年度：阿蘇)

ワンダーフォーゲル部では一年間で以上のような活動を行っています。

以降の頁では、各々のイベントについて紀行文などが書かれていますが、そこに載っていないイベントの内容に興味を持っている方々もいらっしゃると思いますので、少しですが紹介していきます。

- ・部員勧誘：近年では「ワンゲルマン」という寸劇をして、注目を集めています。
- ・オープンワンデリング：新入生のために行われる日帰り登山。
例年は阪急芦屋川駅～六甲山～有馬温泉というコースを歩きます。
- ・文化祭：この部誌を取って頂いた今現在行われているものです。ワンゲルは「山の魅力」を紹介するというテーマで出展しています。
- ・高2引退：体育祭後に行われ、次期部長などを投票で決めます。
- ・OB会：毎年1月2日に行われ、ワンゲルのOBの方々や顧問の先生方と貴重なお話ができる機会なのですが、2023年度は実施されませんでした。
- ・駅伝大会：灘校で行われるクラブ対抗駅伝大会に毎年出場しています。
去年は中2～高1の幅広い学年層で構成されたAチームが
全27チーム中10位の好成績をおさめました。

～ワングルの装備紹介～

ここではワングルのあの大きなザックの中に入った何が入っているのかを簡単に説明します。おのずとワングルとはどんなものなのかが見えてきます。

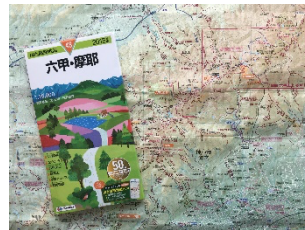
<登山靴>

底の厚い、全体的に硬い靴で足首までがっちりサポートしてくれます。尖った石を踏んでも圧力を分散してくれるので歩きやすく疲れにくいです。買うときは必ずお店で採寸をしてもらいましょう。



<地図・コンパス>

山歩きの相棒。こいつらを自在に操って、行きたいルートを選びます。YAMAP 等の GPS アプリと併用し、近年は道迷いが圧倒的に少なくなりました。



<靴下>

普通のものの倍くらいの分厚さがあって、靴からの圧力を分散してくれます。2重にするとさらに効果的です。



<ザック>

65～75L と超巨大なリュックサック。二層構造であったり、ポケットが多かったり、荷物の負担を分散してくれたり、使いやすさ抜群です。また、付属されている様々な紐が使いこなせれば一人前のワングラーですね！



<ザックカバー>

雨のときにザックの外にかけてザックが濡れるのを防ぎます。
専用の袋に入れるとかなり小さくなります。



<雨具>

上下が分かれたレインコートと折り畳み傘です。

雨の降り方でどちらかを選びます。

レインコートは暑いので嫌がる人も多いですが、防寒具としても使えます。

折り畳み傘は片手が塞がるので山道では使いづらいですが、テント場では重宝します。

<帽子・サングラス・日焼け止め>

山の上では紫外線が強いのでこれらがないと日焼けします。

帽子はつばが帽子の周り全体にあるのが流行です。



<手袋>

軍手とスキー手袋の二種類があります。防寒用に使ったり、岩場を登るときケガをしないようにつけたりもします。これは山だからと特別なものは必要ありません。

<シュラフ>

いわゆる寝袋です。コンパクトにたためてその上温かいという優れものです。長方形の封筒型、右写真のようなマミー型、手足の分かれた人型がありますが、ワンゲルでは保温性の高いマミー型を使っています。値段によって収納具合にかなり違いが出てきます。二万円位だと片手持ちできるくらいでしょうか。



<ロールマット>

テンマとシュラフの間に敷くもの。ごつごつした石や冷たい地面から私たちを救い出してくれるアイテムです。



<食器・武器>

食器はその名の通りですが、武器というのは箸・スプーン・フォーク・ナイフのセットのこと。これを忘れたらご飯が食べられません。



<ポリタン>

水を貯めたり持ち運んだりするためのプラスチックの容器。個人用は 2L、全員兼用のものが 10L は必要になります。水を入れていないときは小さく折りたためる物もあります。それにチューブを付けると歩きながら水が飲めて便利です。



<ヘッドランプ>

洞窟探検家が頭につけているランプ。暗闇から手を使わずに進行方向を照らせて懐中電灯よりも重宝されます。誤って他の人のテントを照らさないよう注意が必要です。



<テント>

ワンゲルの代名詞。狭い。ようでいて案外広い。いややっぱり狭いか。よくわかりませんが狭いです。

この部では以前まで「3～4人用」のテントに4人で寝ていましたが、近年では「4～5人用」テントなるものを部で購入し、部員から人気を集めています。



<コッヘル>

一般的に鍋と呼ばれているもの。ワンゲルでは米もこれで炊きます。三つくらい重ねてマトリョーシカのように持ち運びします。



<ガスコン>

ガスコンロの略称。カートリッジをつけることで火を吐きます。料理するには必須のアイテム。

ワンゲルは安定性と火力の EPIgas 分離型です。



<カートリッジ>

ワンゲル仕様のガス缶です。ガスコンロとワンセット。しょっちゅうキャップがなくなります。残り少ないものを使いたがらないため、倉庫が圧迫されています。



<ランタン・マントル>

カートリッジをつけることで光を発します。テント内や、食事場を照らすのに最適です。

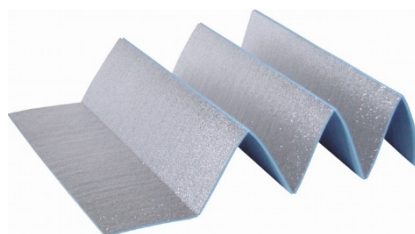
写真はガス式ですが、最近では電池で光る使いやすい LED 式の人が多いです。光量ではガスに軍配が上がります。

みんなヘッドランプを持っているので意外と使いません。



<テンマ・食テン>

テントマットの略。テントの上や食事場に敷いて硬い石から体を守ります。ワンゲルのテンマは薄いアルミマットでロールマットより弱いですが。共同装備です。めちゃくちゃかさばります。



<ペグ>

テントの周りに打って、テントを完全に固定するための釘。プラスチック製は好まれません。



<その他>

濡れたものの水気を取る新聞紙、食器などを拭くキッチンペーパー、マップを首から下げるマップケース、ライター、レジ袋、予備の電池、予備の靴紐、タオル etc.

～キャンプについて～

2024 年度のワングルの活動では夏に 2 回，秋に 1 回の計 3 回，六甲山地周辺でキャンプをしました。それぞれのキャンプでは各々に違った特色がありますので少し紹介していきます。

夏の市ケ原キャンプ…毎年 6 月上旬

その名の通り市ケ原で開催しています。ワングルに入部したばかりの新入部員達はこのキャンプでワングル部員としてのノウハウを学びます。新神戸駅から 1 時間半ほど登ると市ケ原という開けた河原があります。夜はマシュマロを片手にみんなで火を囲んだりします。暑いのはわかりますが、まれに外で寝る猛者がいます。

<コース>

- 1 日目 学校→新神戸→市ケ原(泊)
- 2 日目 市ケ原→新神戸

本庄橋キャンプ…毎年 7 月下旬

夏合宿に向けての練習キャンプという位置づけがされていますが、夏合宿と違って非常に暑いです。特に 1 日目は強烈な日差しを受けながら登り続けるので暑さ対策が重要なキャンプです。また、夏ということでしばしば夕方の料理中、雷雨に遭遇します。そのため、本庄橋キャンプが最も過酷な行事だと言う部員も少なくありません。実際、熱中症になりかける部員も多々いたので 2025 年度は違う形で実施することを考えています。

<コース>

- 1 日目 灘校→落合橋→五助堰堤→本庄橋跡
- 2 日目 本庄橋跡→蛇谷北山→石の宝殿→大平山→塩尾寺→宝塚

・五助堰堤（ごすけえんてい）

住吉川上流にある砂防ダム。広くて大きな川原があり、水生昆虫などが多く生息している。

・本庄橋跡

昔からあった灘地方と有馬を結ぶルート、「魚屋道」の途中にあった石橋の跡。広場になっていて、ここにテントを張ります。

- ・蛇谷北山（じゃたにきたやま<読み方は諸説あり>）
芦屋市最高峰。

- ・石の宝殿

六甲山最高峰にほど近い、六甲山神社（むこやまじんじゃ）にある石祠。六甲山神社は麓にある廣田神社の末社。このキャンプで最も見晴らしの良いところ。

- ・塩尾寺（えんぺいじ）

室町時代に建てられた浄土宗寺院。病を治す「塩からい水」が湧いたという伝承が残っています。

秋の市ヶ原キャンプ…毎年 11 月上旬

このキャンプの特徴は寒さです。まず、11 月なので朝はかなり冷えます。夏の市ヶ原キャンプや本庄橋キャンプでは寝袋が無くても過ごせることがありますが、秋の市ヶ原キャンプではまず無理です。テント撤収のときに手がかじかむので手袋が無いと辛いです。

<コース>

- 1 日目 新神戸駅→布引の滝→市ヶ原
- 2 日目 市ヶ原→新神戸

- ・布引の滝

生田川の中流にある布引溪流の 4 つの滝（雄滝・夫婦滝・鼓滝・雌滝）の総称。古くから和歌で詠まれ、日光の華厳の滝、熊野の那智滝とともに日本三大神滝に数えられています。

- ・市ヶ原

生田川の川原。駅からアクセスしやすいため、多くのハイカーが訪れるところです。

市ヶ原の様子



調理・炊飯の様子



夏合宿 ～穂高岳～

中1にとっては初めての、高2にとっては最後の合宿となる夏合宿では、穂高岳へ。今年は4泊5日での開催。初日は大阪から上高地へ向かう移動日。2日目は宿から徳沢へ歩いてから今回の合宿の拠点となる涸沢ヒュッテへ。3日目から4日目はそれぞれの日の目的地（奥穂高岳、北穂高岳南峰）へ、拠点から登っては降りるを繰り返す予定でしたが、3日目に雨が降り、その日の奥穂高岳への登頂は断念。4日目は元の予定の北穂高岳南峰を諦めて奥穂高岳に登りました。5日目は涸沢ヒュッテから上高地へ降りて、バスに乗り、途中で温泉に寄って疲れを癒してから大阪へ帰りました。

上高地の景色



<行程>

1 日目

新大阪駅⇒(バス 6:00)⇒上高地バスターミナル→(1:00)→明神館

【コースタイム 1 時間】

2 日目

明神館→(1:00)→徳沢→(1:10)→横尾→(3:00)→涸沢

【コースタイム 5 時間 10 分】

3 日目

涸沢→(2:50)→穂高岳山荘→(0:50)→奥穂高岳→(2:40)→涸沢

【コースタイム 6 時間 20 分】

4 日目

涸沢→(3:00)→北穂高岳南峰→(0:20)→北穂高岳北峰→(1:55)→涸沢

【コースタイム 5 時間 15 分】

5 日目 涸沢→(2:00)→横尾→(1:10)→徳沢→(2:00)→上高地バスターミナル

⇒(バス 0:30)⇒平湯温泉「ひらゆの森」⇒(バス 5:00)⇒大阪駅

【コースタイム 5 時間 10 分】

※→は徒歩、⇒は交通機関

この行程は予定です。

～夏合宿紀行文～

《1日目》

今回の夏合宿のスタート地点は新大阪駅、そして7時15分集合厳守であった。私は5時に起床し持ち物に抜かりがないか最終チェックを行い最寄り駅付近のコンビニでグミやチョコなどの非常食を買い、7時前に新大阪駅に着いた。集合場所に友人がいた時の安心感とはとても大きく毎度感じる。初日の行程としては上高地バスターミナルまでバスで行きそこから1時間ほど歩いて目的地である明神館という宿に行くというものであり、そこまで体が疲れる行程ではなかった。だが、バス移動がなんと6時間もあり、これが想像以上にハードなものであった。最初は前後の席の友人たちとトランプを使ったゲームや人狼ゲームをして、かなり賑やかに楽しんでいたのだが、11時頃にひるがの高原サービスエリアで昼食をとりお腹が膨れたのも相まって昼食後のバス車内は静かだった。

上高地バスターミナルは80回生には縁のある場所であった。2か月前に野外活動で訪れていたのだ。私自身は河童橋（バスターミナルから徒歩10分ほど）を再び見ることができてうれしかった。その橋の下に流れている川がすんでいてとてもきれいなのである。明神館ではとてもおいしい夕食をふるまっていただき、さらに温泉のおかげでやる気も補充することができた。次の日の起床時間も早かったため、次の日に備えるべく10時頃には就寝した。

《文責：関谷幸千》

《2日目》

明神館を出発(5:40AM)。朝のやや湿っぽい爽やかな空気を胸いっぱいに取り込み、梓川のせせらぎを聴き、梓川の青、草木の緑、早朝の空の白を見ながら、距離を稼ぐ。明神館→徳沢→横尾と、平坦で歩き易い道だったため、あまり休憩を取らずに歩き、7km歩いたところで、今日の中間目標、横尾大橋に到着(7:30AM)。記念撮影&休憩をとり、出発(7:50AM)。ここからは少し山らしく、道幅が狭く、緩やかに上る。1時間後の梓川上流の本谷橋での休憩時には、既にバテている人もいた。そんな人に追い打ちをかけるように、そこを出ると、ちょっときつめの上りの大きめの岩の階段に入った。体力的にもきつかったが、それよりも、木に囲まれて周りが開(ひら)けず、階段の終わりが見えなかったことの方が応えた。30分ほど登ると、周りが緑から太陽輝く空の青と陽に照った岩の白に変わった。この時、標高2000mぐらいいまで来ていたので、

陽射しは強かったが、涼しい風がやや強めに吹いていたので、暑さは感じなかった。右は深い谷、左はこれまでの落石でできた坂。落石に注意しながらも、右前方に見えてきた涸沢や周りの山々を時折撮影しながら進む。10:30AM 涸沢ヒュッテに到着。チェックインを済ませた後、先に到着した A 班の高校生でテントを設置する。大小様々に岩があったため、設置場所の判断が難しく、風が強かったので、設置するときにテントが飛ばされそうになるなど、テント設置に想定以上の時間と神経を使った。B 班も後から到着し、夕食の時間まで各自寝床を準備しつつ、思い思いに過ごした。79 回生は残雪で雪合戦を楽しんだ。4:00PM～テントで寝るほとんどの高校生と教師の一部は、キャンプ場の炊事場を借りて釜飯を炊いた。後から食べたが、水分が少なく、食べたいとは思えない味だった。5:00PM 小屋で寝る、中学生と自分を含めた高校生の一部と教師の一部はキャンプ場本館食堂にて夕食を食べた。白ご飯、那須のお吸い物、もずくの酢の物、焼き鰯、春巻き、南瓜の天ぷら、ペッパーチキン、千切りキャベツ、ポテトサラダ、トマトが出た(テント勢を高見の見物)。雨の予報が出ていたため、明日の登山を憂いながら、9:00PM 床についた。

《文責：光安出》

《3日目》

午前5時に登りだして昨日眺めた急な涸沢カールを登って日本で3番目に高い山、穂高岳から見た景色は最高、なんて妄想をしました。実際は前日夜からの強い雨と風によって登山は断念しました。午前4時に起床し朝食を作り外へ、屋根のあるところで作っていたのですが横殴りの雨でびしょぬれになりとても寒かったです。食べた後はテントに戻りましたがフライシートの張りがあまくテント内が若干浸水していたため小屋に避難しました。小屋では快適に過ごせました。しかし寝るときはテントでなかなか寝れませんでした。

《文責：青木凱人》



雨に濡れながらの炊事

《4日目》

さて夏合宿の大本命、いよいよ奥穂高岳に登る日です！前日山小屋でトランプをしていただけなのでみんな元気いっぱいですが、朝起きると曇り空でした。3日目は大雨だったことを考えると曇りでもうれしいです。毎食同じ炊き込みご飯でそろそろ飽きてきています。次の夏合宿は炊き込みご飯以外を作ることを心に決めました。この日はわかめの汁もあり、意気揚々とわかめを茹でたはいいものの、このゆで汁どうすんねん。捨てるわけにはいかないし、、飲むしかありません。無駄に水を入れすぎたせいで、わかめ風味のお湯を何杯も飲む羽目になりました。これが意外にきつい。登る前に胃が疲れました。

気を取り直して、ヘルメットをかぶり出発です。歩きは始めるとすぐに低木がなくなり、岩場になります。登山道の左右にある高山植物の花畑の中には猿の群れがいました。こんなところに食べるものあるんかいなと思いながら歩きました。「ザイテングラート」とよばれるところから鎖場やはしごが出てきやしたが、難なく通過。この道からは涸沢ヒュッテやテント場のテントが見えて綺麗でした。そのまま歩くと穂高岳山荘に到着して少し休憩です。この穂高岳山荘から見ると涸沢ヒュッテまで一直線に雪渓があり滑り台みたいにすれば一瞬で帰れるなーと考えてしまいます。多分死んでしまいますが。登り始めようとしたその時、どんどんガスってきてしまいました。風

強いのになんでここだけガスるねんと思いつつ最後ののぼりを登ります。こののぼり、始めが一番怖い。梯子が2連続であって、下から見るとその梯子はほぼ垂直、そして落ちたら真っ逆さまです。ちょっとビビりながら登りました。そこを登り切ったらあとはそんなに怖くありません。山下君と初3000mを喜びながら、進むうちにどんどんガスっていき、前方5mぐらいしか視界がありませんでした。もちろん綺麗な景色は見れず、、そのまま頂上に着きました。頂上には小さな祠と展望盤。もちろん景色は何も見えません。外国人の方が先にいらっしゃって、たぶん写真を撮るようお願いされたのですが、まったく聞き取れず。英会話教室で習得したわかっている感じでうなづく技術を活用し、写真を撮りました。青木くんのように山頂でも英単語帳を開くぐらい勉強しないとなあと反省です、、、。その後は、登りで使った道を帰るだけです。パノラマコースを通して高山植物を眺めながら楽しく涸沢ヒュッテに帰ることができました。涸沢ヒュッテに泊まるのもこの日が最終日となり、夜ご飯も炊き込みご飯ですが、これが最後だと思えば美味しく食べることができました。残ったご飯食べてくれた小西君には感謝しかありません。この夜はテントのメンバーを入れ替え、青木君と露口君が一緒になりましたが、彼らが転がってきて僕と小西くんの睡眠を妨害したのは許していません。



奥穂高岳の頂上

《文責：小山航平》

《5日目》

この日は朝の4時半頃に起床した。前日はテント泊だったので夜遅くまで眠れなかったが、雨が降らなかったのは幸運だった。朝食準備担当の先輩方は3時頃に起床して米などの準備をしてくださっていて、ありがたかった。ただ、会計が異なる種類の炊き込みご飯の素を分量を考えずにいれてしまったため、とてつもなく水気の多い炊き込みご飯（かどうかもわからないもの）になってしまった。見た目はよくはなかったが、問題なく食べられる味で安心した。2日前とはちがってしっかり晴れたために見られた日の出はやはり素晴らしかった。

朝食を食べた後、テント等をしっかり片付けてヒュッテ組と合流した。そして、二日間以上お世話になった涸沢を降りることになった。横尾から登ってくる時に感じたザックの重みも3日間の涸沢での宿泊でかなり軽減されていた。3時間ほどかけて横尾につき、少し休憩した後はすぐに上高地に向かった。横尾から上高地は3時間ほどの道のりだが、アップダウンはほぼ皆無なので、私たちは普通に雑談を楽しんでいた。ただ私は、涸沢が遠ざかっていくのを見て、少し寂しい気分になった。何事もなく上高地について反省会をした後、バスに乗って温泉（ひらゆの森）に行った。有名な温泉らしいが、私は風呂が好きでないうえに、熱い温泉に一分でもつかると眩暈がするので、一瞬だけ浸かってすぐにあがってしまった。ただ、ほかの人たちは楽しんでいようだったので、少し残念に思った。また、風呂からあがってすぐにトイレに長くこもっていたせいで、集合時間に間に合わせるために昼食を諦めざるを得なかった。同級生は普通に近くの飲食店で昼食にありつけていたので、ワングルに入ってから一番辛かった。

そして、新大阪に向かってバスに乗り込んだ。6時間程度もかかったが、大抵の人は疲れて寝ているか友達と会話していたので平気そうだった。ただ、私はそのどちらもできなかったのが非常に暇だった。非常に暇な6時間を乗り越えて新大阪駅に着き、そこで解散した。ただ、私はそこから帰宅するのに1時間半かかるので、少し気が重かった。

《文責：古川晦》

冬合宿 ～小豆島～

いろんな事情で雪がたくさん積もっている山には行けない灘校ワンダーフォーゲル部の冬合宿。今回はフェリーに乗って小豆島に行きました。1日目は、神戸港からフェリーに乗って小豆島の坂手港へ移動した後、徒歩でマルキン醤油記念館、道の駅に行って満喫してから宿に到着しました。2日目はワングルらしく三笠山と星ヶ城山に登りました。途中、日本三大渓谷美である寒霞溪にも立ち寄りました。3日目は宿がある土庄から重岩など名所を回りました。重岩へ向かう道には200段ほどの階段があって、さすがのワングル部員でも少し苦しそうでした。

<コース>

1日目

JR 三ノ宮駅東口改札⇒(連絡バス 10 分)⇒神戸港⇒(フェリー100 分)⇒坂手港→(27 分)→マルキン醤油記念館→(80 分)→道の駅小豆島オリーブ公園→(17 分)→小豆島オリーブユースホテル

【コースタイム 1 時間 55 分】

2日目

小豆島オリーブユースホテル→(93 分)→猪谷登山口→(20 分)→こううん駅登山口→(90 分)→三笠山→(46 分)→星ヶ城山→(46 分)→三笠山→(50 分)→猪谷登山口→(57 分)→草壁港→(送迎バス 30 分)→旭屋旅館

【コースタイム 6 時間 45 分】

3日目

旭屋旅館→(64 分)→重岩→(71 分)→鹿島明神社→(30 分)→エンシジェルロード→(27 分)→旭屋旅館→(送迎バス 40 分)→福田港⇒(フェリー100 分)⇒姫路港⇒(連絡バス 24 分)⇒姫路駅

【コースタイム 3 時間 15 分】

※→は徒歩、⇒は交通機関

～冬合宿紀行文～

《1 日目》

この日は JR 三ノ宮駅に午前 7 時 40 分に集合だったので、春休みなのに 5 時に起きることになった。登校するときでも 6 時に起きる僕にとってつらい朝になった。まだ眠い体に鞭うってのんびり支度を済ませ出発。三ノ宮駅からは連絡バスで神戸港に行き、小豆島に向かうフェリーに乗った。内田先生が言うにはかなりいい船だそうで、確かにとても広く、充実していた。フェリーが出航したらまずは甲板で景色を見た。冬の海上で、なおかつ船は移動しているため風が強かったのもとても寒かったが神戸の街並みや瀬戸内海の大海原を見ることができた。景色を見るのに飽きてくると船内に戻り、探検を始めた。船を探検していると足湯を発見。足湯は宙にせり出したバルコニーにあり、瀬戸内海を眺めながら入ることができる。80 回生のみんなで足湯に入っていると明石海峡大橋の下を船がくぐった。普通なら絶対見ることのない橋の裏側を見ることができた。また、足湯の横にはガラス張りの床があり、その上にのれるかどうか度胸試しもした。ずっと足湯を占領しているわけにもいかないのでほどほどにして客席に戻った。客席は畳になっていて、みんなで輪を作って人狼や大富豪をした。人狼では強すぎて市民陣営になったら大体 1 日目の夜に殺される人がいたり（逆に言えば 1 日目の夜に殺されていなかったら大体人狼）、市民なのに役職持ちに対抗するリアル狂人がいたり、人の顔を見て人狼かどうかをジャッジする猛者がいたりするなどカオスだったが楽しむことができた。11 時になると階下の食堂で少し早い昼食をとることにした。冷やしラーメンやキーマうどんなど今まで見たことがないメニューがあったが、肉うどんという無難なものを選んでしまった。やっぱりおいしかった。11 時 35 分に小豆島の坂手港に到着すると、少し歩いてマルキン醤油記念館へ。醤油の歴史を見てまわった。売店では醤油ソフトクリームを買った。意外にも違和感はなくおいしかった。入館記念として醤油もいただいて記念館を後にした。そこからまた歩いてオリーブ公園へ。ここは実写版魔女の宅急便のロケ地となっていて、風車や主人公であるキキの実家の店などアニメで見たことのある建物がある観光地である。しかし、僕らがここで何をしたかというと鬼ごっこである。どうしてそうなったのかは思い出せないがとにかく鬼ごっこをした。登山靴だったので走りにくく、逃走する側は地形を生かしてうまいこと逃げるので追跡する側の負担がすごかったが、結局楽しんだ。鬼ごっこが終わったのが集合時間の 30 分ほど前で、このあと急いで観光した。オリーブ公園を出たらあとは宿に向かうだけだ。この日の宿は小豆島オリーブユースホテルだった。この宿には漫画があり、また、卓球台もあったので学生が楽しむには十分だ

った。また、部屋はというと二段ベッドが 2 つとその奥に四畳半の畳という 2 年前の夏合宿で宿泊した赤岳山荘が脳裏にちらつく構成だった。夕食とお風呂を済ませてからは自由時間だったので同学年で 1 つの部屋に集まって宿にあったキングダムを読みながらガーティックフォン（絵の伝言ゲーム）をして過ごした。明日がこの冬合宿のメインの行程なので早めに午後 9 時 30 分過ぎに自分の部屋に戻った。明日の行程に思いを馳せながら就寝。



船の上から見る
明石海峡大橋

《文責：秋田祐月》

《2日目》

冬合宿の2日目。宿泊した小豆島オリーブユースホテルから出発です。この日は3日間で唯一のまともな登山です。小豆島の有名な観光地、寒霞溪を見ながら島で一番高い山、星ヶ城山に登ります。大きな荷物は前日のホテルに置かせてもらえることになり、空荷での行程になりました。まずは前の日に歩いた道を海岸沿いにしばらく戻り、そこから内陸側に進んでまずは登山口を目指します。登山口までは登り基調の道ですが、舗装されていました。道の途中にはやたら長いダムがあり、休憩中に往復しようとしたのですが、片道 500mほどあると知って諦めました。登山口は寒霞溪ロープウェイの下駅の近くにあり、そこから本格的に登山開始です。そこそこ斜度のきつい道でしたが、意外ときつなく、思っていたよりもすぐに山の上の展望台に到着しました。山の上には車道も通っています。道の途中からは変わった形の岩を多く見る事ができました。展望台に出てしまえば、ロープウェイの上の駅まではすぐでした。有名な観光地ということもあり、売店やトイレなども充実していました。寒霞溪から星ヶ城山の山頂まではだらだらと登る感じで、思っていたよりも長く感じました。山頂からは瀬戸内海の景色が見え、遠くには四国が見えていました。帰りは行きとは少し違ったコースを通り、こちらでも変わった岩が多く見えました。途中にはなんと野生のサルもいました。途中で行きと同じ道に出ると、そこからは海沿いまで同じ道を歩きます。草壁港でその日の宿、旭屋旅館さんの送迎バスに拾ってもらい、途中前日のホテルで荷物を回収しながら宿に向かいました。宿では香川県の名産、うどんなどを食べる事ができました。



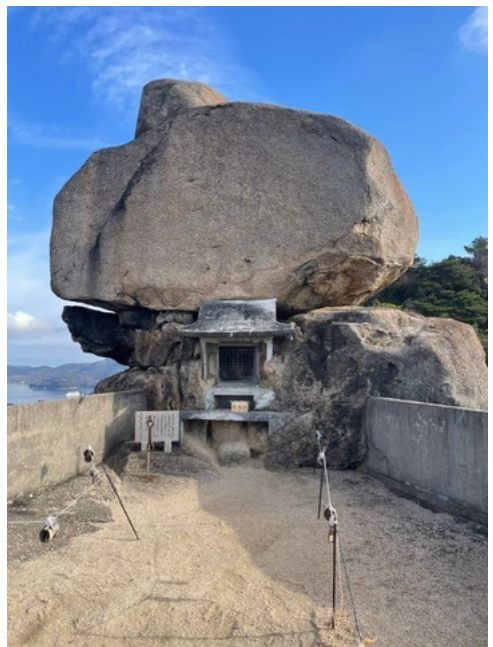
寒霞溪

《文責：小西權世》

《3日目》

7時起床。3日目は2日目とは違い山に登るわけではなく地上を歩く予定で、その上空荷だと分かっており、前日にそこまで早く寝ていなかった。そんなこともあってか少し眠い目をこすりながら朝食を食べた。朝食を食べ終わると旭屋旅館に荷物を置かせてもらい出発。この日は小豆島の中でも土庄という地域を一周する約3時

間の行程だ。ちなみにこの土庄という町は僕の好きなおとあるアニメの聖地でありこの日はテンションが高かった。かなり有名なアニメで映画もあるので気になる人は調べてみてほしい。旭屋旅館を出発してから1時間ほどのどかな海沿いの道を歩くと小瀬石鎚神社の駐車場に到着。少し山のほうにある駐車場だが、ここからかなりの階段をのぼって小瀬石鎚神社、そしてその御神体の重岩へ行った。階段の最後のほうはもはや階段ではなく岩場だったがなんとか重岩に到着。この日は晴れだったのもあり海風が涼しく静かな瀬戸内海を望む絶景だった。そして木の鳥居をくぐると高さ6メートルほどある重岩にご対面。重岩に圧倒されながらお参りした。ちなみにこの重岩もそのアニメに登場しておりそのアニメ曰く階段の数は415(よい恋)で、男女でくると付き合えとかなんとか。男だけできた我々には無縁の話だが。次にまた一時間ほど歩くと鹿島明神神社に到着。ここでもまたお参りしてついでおみくじを引いたのだが、なんとおみくじが自販機式で文明化を感じた。ちなみにここもまた例のアニメの聖地で調子に乗って恋愛守りを買ってしまった。そして30分ほど歩くとエンジェルロードに到着。ここで一時間ほどの自由行動だ。ここエンジェルロードは一日に2回干潮時に海の中から砂の道が現れ渡れるのだが、ここ実は恋人の聖地で、しかもこの日は12月25日でクリスマス。こんなカップルしか行かないような時と場所に来てしまった灘校ワングル部の男ども一行だったが、エンジェルロードを渡りついでに記念撮影。本来恋人たちが鳴らすはずの鐘をならしたり、海にはしゃいだりした。その後少し歩くと5時間ぶりの旭屋旅館に帰ってきた。そしてお昼休憩となり一時間ほどの自由時間が与えられたが、僕ともう一人の友達はお昼を食べることなく例のアニメの聖地へ行ったりして過ごし、土庄から福田港へのバスに乗った。そして福田港から帰りの船に乗った。船の中では前日の夜もしていた人狼を懲りずにまたしてあつという間に時間が過ぎた。そして船がついに姫路港に到着。姫路港で反省会をして解散。家に帰るまでが合宿だが、とりあえずここまでで冬合宿3日目紀行文はおしまい。



重岩

《文責：小池慶知》

～六甲全山縦走～

六甲全山縦走とは、毎年 1 月下旬または 2 月上旬に行われてきた、須磨から宝塚までの 50km を、15 時間以上かけて歩き通す行事です。ワングルの行事の中では一番過酷と言ってもいいほどの行事です。そのため、体力や足の痛み、精神面などによって途中で下山する部員も出ることは少なくありません。その過酷さをわざわざ部活行事でなくてもいいのではないか、という意見が最近出てきたので、近年はこのコースを半分ずつに分け、2 日間にかけて実施しているのですが、今年は 2 日目が実施できませんでした。ですので、紀行文は 1 日目のみとなっています。下のポイント紹介は 1 日で歩き通す場合の時間を書いています。

<主なポイント紹介>

・JR 塩屋駅 (7:00)

本来は山陽須磨浦公園駅を始点としますが、この部では毎年ここから始まります。灘校よりかなり西側にあるので、朝 7 時に集合するのがなかなか大変です。

・須磨山上遊園 (7:40 ごろ)

しばらく歩いてきて暑くなってくるので、このあたりでいつも上着を脱ぎます。

・梶尾山 (8:30 ごろ)

須磨の海を一望できる場所です。なお須磨山上遊園からここまでに 400 階段という鬼のように長い階段があります。

・須磨アルプス(→)

ごつごつとした岩場なので、日本アルプスの稜線を歩くような気分を少しだけ味わえます。



・鶴越 (11:30 ごろ)

一ノ谷の戦いで源義経が馬で駆け下りたとされる場所です。神戸電鉄の駅があるので体調が悪くなったら帰れます。ここも差し入れポイントの一つ。

・菊水山 (12:40 ごろ)

縦走路では最も急な登りです。早く山頂に着こうとして急いでしまいがちですが、ここはゆっくりと登って体力を温存するのが大切です。このあたりから足に疲労がたまってきます。

・市ヶ原（14：30 ごろ）

キャンプでおなじみ市ヶ原。30 分ほど道を降りていけば新神戸駅に着くのでリタイアも可能です。ここがちょうど中間地点でしょうか。

・摩耶山掬星台（16：00 ごろ）

摩耶山から見える神戸の夜景は日本三大夜景の一つだそう。ケーブルで楽々ここまでたどり着いたカップルを見た日には9時間もかけて歩いてきた我々男子校生は何とも言えない感情を抱きます。

・記念碑台（17：45 ごろ）

六甲山自然保護センターの近くにある、六甲山開発の祖と言われるイギリス人アーサー・ヘスケス・グルームの記念碑。ここも景色が良く、展望台となっています。このあたりで日が落ちて真っ暗になります。リタイアするならここが最後です。



先輩からの差し入れを食べてラストスパート！

・六甲ガーデンテラス（18：30 ごろ）

とても綺麗な夜景が見られます。疲れて荒み切った心にはほぼ唯一の癒しです。

→ガーデンテラスでは六甲枝垂れのライトアップが見られます。



・六甲山山頂（19：30 ごろ）

一番高い地点です。疲れに加えて寒さも襲ってきて辛いです。

・塩尾寺（22：20 ごろ）

山頂から延々と山道を下り続け、ここまでくればゴールはもうすぐです。しかしここからは最大の難関、めちゃくちゃ急なコンクリの下り坂が待っています。疲れた足を徹底的にいじめてくるので最後まで気を抜かずに行きましょう。

・宝塚駅（23：00 ごろ） ゴール。よく頑張りました。



2022 年度の六甲全山縦走の
集合写真

～六甲全山縦走紀行文～

《1日目》

朝 8 時(実際は少し遅れて 8 時過ぎ)に塩屋駅を出発しました。1 週間ほど前から気温の温かい日が続いていたのに当日は気温が下がったので上着を 2 枚着ていきましたが、歩き始めるとすぐに暑くなりました。昨年歩いたときは最初のチェックポイントの須磨山上遊園の横の道がかなりきつかった覚えがあり不安でしたが、思っていたより楽で安心しました。その後順調に山道を歩き、途中の高倉台を通り過ぎると、とてつもない段数の階段が目の前に出てきて、昨年の嫌な思い出が蘇りました。それでも道に文句を言いながら何とか気合で階段を登りきり、しばらく道を歩いていくと、ゴツゴツした岩場の馬の背に到着しました。馬の背には木々が生えておらず岩肌がむき出しになっていて、風もよく吹いています。なぜここだけ木々が生えていないのでしょうか。ここからはあまり覚えていませんが、高取神社を通して市街地に出て、鶴越駅に到着しました。ここで高 2 の OB の方が差し入れのミカンを配ってくださり、それを皆で食べたのをよく覚えています。ここから、個人的に最もきつかった菊水山への登りです。昨年一番苦しんだのをよく覚えていたので覚悟が出来ていた分疲労は軽減されましたが、それでもきつかったです。とても。なんとか足を動かして菊水山の山頂に着くと、もうここからは楽なものです。有馬街道に架かる天王吊橋を渡り、鍋蓋山の山頂で休憩を挟み、年に 2 度キャンプをする市ヶ原に到着しました。ここからキャンプの行き帰りで馴染み深い道を下り、新神戸駅で解散しました。ちなみに私はここから満員のバスで帰り、バス停で降りた後は坂道を登って帰ったので、さらに疲労が増しました

《文責：文責：東一真》

春合宿 ～阿蘇～

春合宿も冬合宿同様、毎年3月下旬に2泊3日で主に1000m級の山々を登る合宿です。2024年度は投票の結果、阿蘇山の高岳、中岳、そして阿蘇南外輪山の一つである俵山に登ることになりました。

移動は、阿蘇まではフェリー、現地では貸切バスを使用しました。バスに荷物を置いておくことができるので、空荷と呼ばれる必要最低限なものだけ持っている状態で歩くことができました。1日目は夕方からフェリーに乗って、海の上で泊まりました。2日目は別府港からバスで登山口に向かって登山する予定でしたが、ひどい雨風で撤退することになりました。3日目は晴れの中、俵山に登りました。頂上からの景色がとても良かったです。山から降りた後、バスで熊本駅へ移動し、新幹線で大阪に帰りました。

<行程>

1日目

集合 大阪メトロ トレードセンター前駅⇒

大阪南港コスモフェリーターミナル 19:05 発 ⇒(さんふらわあ)

【コースタイムなし】

2日目

(さんふらわあ)⇒別府港 6:55 着 ⇒(チャーターバス 約2時間)⇒仙酔峡→(1:50)→

高岳→(0:20)→中岳→(0:45)→砂千里ヶ浜→(0:50)→古坊中登山口→(0:10)→

第四ゲート→(2:10)→阿蘇市坊中野営場⇒(チャーターバス 20分)⇒熊本 YMCA 阿蘇キャンプ

【コースタイム 6時間5分】

3日目

宿 ⇒(チャーターバス 約30分)⇒俵山交流館 萌の里→(2:30)→俵山→(1:40)→俵山峠

展望所 →(チャーターバス 約1時間)→JR 熊本駅 16:04 発→(新幹線)→新大阪駅

【コースタイム 4時間10分】

※→は徒歩、⇒は交通機関

～春合宿紀行文～

《1日目》

ワングル部の部長の朝は早い。と言いたいところですが、今回はフェリーでの出発で 17:30 分集合なので別に早くないし、そもそも部長でもないので残念ながら言う権利がありません…。2025 年 3 月 23 日の午後 5 時 30 分にニュートラムのトレードセンタ前に集合で、僕は 20 分ほど前につきました。ですが、この日は JR 神戸線や京都線が遅延しており、遅れてくる人も何人かいました。これは仕方ない。で、僕はその間に ATC の中にあるローソンでチョコを買いました。17 時 40 分くらいにみんな集合しましたが、登山靴ではなく普通の靴で来ている人が何人かいました。それで、トランプ大統領のゼレンスキー大統領に対する「あなたはカードを持っていない」と同じように、顧問の先生から「あなたは靴を持っていない」と言われていて新品の靴を買うことになっていました。いろいろありましたが、さんふらわあ号に無事乗れました。この船は 2023 年頃に就航したらしく、とてもきれいな船でした。今日寝る部屋はプライベートベッドというもので、1 区画に 4 つのベッドがあつて、1 つの部屋に 4 区画 16 ベッドがあるという構造でした。基本的に 1 つの部屋には灘校生しかいないので快適に、ほかのお客さんに迷惑をかけずに過ごせたと思います。船に乗ると友達の A くん（副部長）が先生に召集されてました。その後、甲板に出て、星を見たり、コサックダンスを踊ったり、陸にいる人に手を振ったりしながら過ごしました。甲板からは万博のリングも見ることができました。想像以上にデカかったです。この部誌が配られる頃には万博が始まっているんですね。一通り甲板で喋った後、船内に戻りました。この船の目玉となっているのがビュッフェで、2500 円と結構お高いのですが、かなり評判がいいそうです。僕はこれに行ったのですが、80 回生の何人かは家からお弁当を持ってきており、それを食べていました。結局 80 回生 8 人でビュッフェに行き、4,4 で別れて座りました。メニューはサラダ系から、豚の薄く切ったやつとか、新鮮な刺身、ナポリタンやフライドポテトなどのお惣菜系、アイスなどのデザートと、種類は多くはなかったですが、どれもクオリティがかなり高かったです。大分の郷土料理の「りゅうきゅう」という、ご飯の上にタレで絡めた刺身をのせて、お茶漬けにする料理があり、とてもおいしかったです。僕の横の席の友達の K くんは過積載車でもびっくりの量を一回で持ってきていました。で、その 3 分後くらいにうどんをこぼしていました。僕は 2 周ほどして、刺身や豚のやつ（名前を覚えていない）や初耳のお魚さんの料理（これは自分が無知なだけ）を結構食べました。その後、デザートに小さな

アイス 6〜7 個と、チョコレートフォンデュしたマシュマロとを食べました。アイスと一緒にいちごも食べました。その後、みんなでトランプをやることとなり、レストランを開放してくださったので、そこにうつって引き続き大富豪をやりました。T くんが異様に強かった気がしました。このフェリーには展望大浴場がついているので、10 時過ぎから入りに行くことにしました。この展望大浴場はだいたいいつみても混雑度表示が「混んでいる」となっていて、カバでも住んでいるのかなーと思うレベルに人気だったので夜遅くに入りに行きました。10 時過ぎにもなると結構すいていて、ほぼ貸し切り状態でした。何人かいた（僕たち数人が入ったらほとんど出て行ってしまった）お客さんの一人（僕たちより少し年上くらい）が T くん「え、君（たち）15 歳なん！19 歳くらいに見えたわー」いう微妙に褒めてんのか煽ってるのかわからない文言（多分褒めてくれてる）で喋りかけていました。その後、10 時 30 分で追い出しがかり、風呂を後にしました。そこから、もう一回起きている人で集まって、トランプをして 12 時頃に解散しました。なんか、プライベートベッドの中にテレビがあることに気づいてしまい、適当にテレビをぼーと見ていたら 12 時 40 分くらいになっていました。あしたバスで寝るといいや。と思って歯磨きして 1 時前に寝ました。おやすみなさい。で、二時間後に鼻血がでてきて止めるのに苦労しました。朝は 5 時 40 分くらいに起きて、お風呂に入りに行きました。朝なので少し景色が見えました。今日の工程は火口付近まで行くから楽しみだなーと思っていましたが…。この話は 2 日目に書いてあると思うので、是非そちらもお読みください。ここまで、拙い文章を読んでいただきありがとうございました。

《文責：上田悠晴》

《2 日目》

2 日目は船上でのスタートです。大分港に到着後バスに乗って仙酔峡に向かいます。この日の日程は高岳、中岳を登るもので、阿蘇山の最高峰であり火口も望めるというので今回の合宿の目玉です。阿蘇山の外輪山（カルデラの縁のような）を越え阿蘇市内に入るとき、その不思議な光景にみんな目を奪われたようでした。（実際はみんなスマホのカメラを構えて写真会でしたが。）仙酔峡にてバスを降りるとそこには大きくそびえ立つ高岳が！他の山とは違って緑はなく、ごつごつした岩が山肌を覆っていました。仙酔峡の駐車場には避難用の建物があり、これが本当の火山であることをひしひしと感じさせました。予報では曇りのち雨となっていて空の機嫌も悪そうだったのでみんな不安感も持ちながらの登山スタートとなり

ました。最初は順調に登っていきましたが少し登ると激しい風に襲われました。体感で言うと台風よりもすごい強風で（体感ね。これ大事。）止まって座りこまないとバランスを崩してしまいそうでした。それでもなんとか進んでいきましたが風が収まる気配はなく、それに加えぽつぽつと、だんだん本降りの雨がやってきました。とりあえず進まないと、と歩みを止めなかった我々も岩陰に隠れてやり過ごそうとするしかありませんでした。高岳の 3 分の 2 ほどは登っていて高岳に登りきるとほとんど下りなので生徒たちは登り切りたいという気持ちとこのままだと危ないという葛藤の末、ここで折るかえすことになりました。悲壮感がなんとなく漂う中で雨風は止むことを知りません。濡れて滑る地面に気をつけて下っていきましたが雨はあられに変わり体を打ちつけ、空は雷の音を響かせていました。まさに自然の暴力というものです。全身びしょ濡れでなんとか仙酔峡まで戻り、迎えのバスに拾ってもらいました。登頂することは出来ませんでしたが、自然がいかに恐ろしいものか身をもって体験することが出来た登山だったと思います。

バスに乗った後は熊本 YMCA キャンプに向かい、事情を聞いた職員さんが沸かしてくれていたお風呂に入り雨風で凍えた体を温めることが出来ました。このときの安堵感をなんと言え
ばいいでしょうか。部屋の前にはみんなの濡れたザックやら服やらがあり、これだけを見ても大変な状況だったのがみてとれると思います。ご飯を食べてひとまず 2 日目は一件落着という訳ですが、次は俵山登山が控えています。次は無事に登れたらいいですね。3 日目も乞うご期待。



びしょ濡れになりながら
下山した部員たち

《文責：大西奏》

《3日目》

3日目、春合宿も最終日だ。前日びしょびしょになって体調が心配だったがよく眠れたおかげで気持ち良い朝を迎えられた。焼き魚や卵焼きといった古き良き日本の朝食をすましたら朝 8 時に出発、本日の行程は俵山に登山後、熊本駅から新幹線で帰宅だ。前日の途中下山によって倍増した山への期待に胸を踊らせつつバスに揺られること 30 分、俵山交流館萌の里に到着。ここには尾田栄一郎先生が熊本出身との事からワンピースのナミの像があるそうなのだが時間的に見ることは叶わなかった。さあここからが登山の始まり、俵山を目指して歩いていく。290m から 1095m まで登るので単純計算 800m の上りだ。しかも前日大量に雨が降ったため道はぐちょぐちょ。きつい上りに地面のぬかるみがかけ合わさって皆何度も滑っていた。手をドロドロにしながら何とか 3 時間半程かけて 12 時頃登頂。俵山は阿蘇山のカルデラの大きな外輪の一部なのだがなんとも不思議でとても綺麗な景色だった。ここからは下山。1 時間半程で俵山展望台まで下りてきた。道中いい時間で腹が減ったのでカロリーメイトを食べた。カロリーメイトはチョコ味こそが原点にして頂点だと思う。展望台からはバスに乗って 1 時間ほどで熊本駅に到着。熊本駅で少しのお土産タイムの後、新幹線さくら号に乗って大阪までひੱつ飛び。途中、実家に帰るためき博多で下車した光安君の家族から”今川”焼きをいただいたりしながら 3 時間ほどで到着した。そして改札を出て自由解散、これで今回の春合宿は終了した。天候には恵まれなかったけど阿蘇山のカルデラは今までに見た事ない光景で貴重な体験だった。

《文責：露口滉人》



俵山頂上での集合写真

～編集後記～

まず、最後までこの部誌を読んでもいただきありがとうございます。ワンゲル部員の楽しんでいる様子や山への情熱を感じてもらえたでしょうか？その一端を少しでも共有できていたら幸いです。

編集者自身としては、2024 年度のワンダーフォーゲル部の活動は、従来の活動から今の時代に合った活動へ変える始まりとなるきっかけとなったのではないかと思います。2025 年度が始まりますが、ワンダーフォーゲル部がこれからもしっかり活動をするための基盤となる一年を先生方や部員のみんなと過ごすことができたことに感謝します。

《文責：福井 秀卿》

Twitter での情報発信も随時行っております。是非ご覧ください。

Twitter : @nwvk_official

また、部誌に関して何かございましたら、

nwvkofficial@gmail.com

までメールでご連絡下さい。

2024 年度 ワンダーフォーゲル部部誌

編集者：福井 秀卿

総責任者：福井 秀卿

Special thanks to:

全ワンダーフォーゲル部員

2025 年 5 月 2 日・3 日 発行